

# 『六大新報』年賀広告にみる東寺濟世病院における 従事医師の推移と病院の変遷

八木 高秀

東雲診療所 仏教医学研究室

受付：令和2年4月6日／受理：令和2年7月20日

**要旨：**濟世病院は明治42年に真言宗祖風宣揚会により東寺境内に設立された慈善病院である。同会の機関紙『六大新報』に掲載された明治43年から昭和21年の濟世病院の年賀広告に47名の医師氏名が記された。開院時に入職した2名を加えると病院が存在した38年間に少なくとも49名の医師が従事した。小林参三郎が院長を務めた時代を前期その後を後期に分けると、前期は小林が若い医師達と共に仏教教義である「心身不二」に基づき身体的治療と精神的治療（信仰治療）を併用して診療した。後期は院長よりも顧問の指導下で京都大学所属の中堅医師が通常の西洋医学による身体的治療をした。院長・顧問を含む従事医師が前期から後期へ推移するにつれて京大の支援下で診療や病院運営は安定したが病院の特異性は失われたと思われる。

**キーワード：**濟世病院，小林参三郎，六大新報，京都大学，済生会

## はじめに

濟世病院は明治42年に真言宗祖風宣揚会（以下「宣揚会」と略す）による社会事業の一環として京都東寺境内に設立された慈善病院である<sup>1)</sup>。名称が類似し混同されることのある恩賜財団済生会（以下「済生会」と略す）は明治44年の設立で、後に濟世病院と交流があるが病院開設には何ら関与していない<sup>2)</sup>。

病院開設の中心になったのは当時宣揚会会長・土宜法龍，院長・小林参三郎，院主・矢野長蔵，主事・清瀧智龍である<sup>3)</sup>。また開設二年後から真言宗布教師真井覚深が信仰談話会に加わった<sup>4)</sup>。小林は西洋医学（物質的治療）と，神仏への信仰が呼び起こす患者自身の自然治療力を高めること（精神的治療）の併用という心身不二の治療を病院の治療方針とした<sup>5)</sup>。病院設立の経緯は『六大新報』（以下『六大』と略す）第315号（開院記念号 明治42年）に詳しく記載されている<sup>6)</sup>。物質的（身体的）治療中心の西洋医学を導入した明

治時代において，米国で医学を修めた小林の説く精神身体的治療論は珍しく内外の知識者層から非常に高い評価を受けた。そのためか濟世病院に關した先行研究では小林の治療論と關連して論じられることが多く<sup>7)</sup>，病院に従事した小林以外の医師について触れられることは少ない。小林死去後院長に西谷宗雄が就任した際に『六大』や『京都医事衛生誌』などで若干の記事が掲載されたが<sup>8)</sup>，他の医師達についての記事や記録はほとんどない。僅かに『六大』に掲載された濟世病院の年賀広告（以下「広告」と略す）が一部の年度を除いて毎年職員連名で出されており，広告を出した当時の従事医師の氏名を知ることができる。（明治42年から昭和21年の『六大』に掲載された濟世病院の広告を本稿末に付した）

開院から閉院至る38年間の広告には小林と顧問（後述）を含めて医師48名の氏名（1名は改姓したと思われ実際には47名）が掲載された。また東寺で6月に仮開院する直前の3月18日から4月30日まで播磨加東郡南坊神咒寺で濟世病院播



院長) 外科婦人科 従事年数17年.

**稲垣長寿** 明治41年8月京都府医籍登録(追録) 明治42年着任(助手)<sup>13)</sup> 従事年数1年以内. 彼の経歴や業績等は筆者が調査した限り詳細不明.(以下, 同様の場合「詳細不明」とのみ記す)

**高城正治** 明治18年(1885)9月12日生 島根出身 明治42年京都医専卒 明治42年着任(25歳・医員) 従事年数1年以内.

②明治43年(1910)(以下, その年度の広告に初出で掲載された医師氏名と経歴を記す)

**山岡弘光** 明治14年(1881)12月9日生 京都出身 明治40年京都医専卒/大正11年学位受領(京大) 明治42年着任(29歳・医員) 小児科 従事年数1年. 学位論文「狂犬病毒接種法外四篇」<sup>14)</sup>.

**山本亀治郎** 明治17年(1884)1月24日生 三重出身 明治43年京都医専卒 明治42年着任(26歳・医員) 内科 従事年数1年. 「卒後京都府立病院産婦人科教室医員奉職後 済生病院内科担当一ヶ年奉職<sup>15)</sup>」.

③明治44年(1911)

**梅澤亮吉** 明治18年(1885)7月11日生 大阪出身 大正5年金澤医専卒/昭和10年学位受領(熊本医科大学) 明治43年着任(26歳・医員) 産婦人科 従事年数1年. 学位論文「乳腺發育及乳汁分泌に関する実験的研究」<sup>16)</sup>.

**永田梅之助** 明治3年(1870)9月29日生 明治30年大阪高医卒 明治43年着任(41歳・医員) 内科 従事年数1年.

④明治45年(大正元年)(1912)

**小屋経雄** 明治14年(1881)4月18日生 大分出身 明治40年京大卒/昭和7年学位受領(京大) 明治44年着任(31歳・医員) 産婦人科 従事年数1-5年(1年). 「卒後海軍軍医任官 大正3年辞任 海軍軍医中尉 同4年3月ヨリ同6年8月まで京大高山教室ニ副手勤務<sup>17)</sup>」.

**木澤長壽** 明治16年(1883)1月27日生 和歌山出身 明治41年京都医専卒 明治44年着任(29歳・医員) 内科 従事年数4年. 「卒後京大伊藤外科中西内科(二ヶ年間)勤務 済世病院(東寺)ニ勤務大正三年より現地開業<sup>18)</sup>. 木澤医院 済

生病院(東寺)ニ勤務<sup>19)</sup>」.

**山口栗** 明治18年(1885)12月23日生 岡山出身 明治42年岡山医専卒 明治44年着任(27歳・医員) 内科婦人科 従事年数13年. 「山口病院 卒後母校内科教室ニテ研究後東寺済生病院副院長 大正14年開業<sup>20)</sup>」.

**松山勇太郎** 明治7年(1874)12月7日生 明治42年京都医専卒 奈良出身 明治44年着任(38歳・医員) 従事年数1-5年(1年).

**多田文太** 明治2年(1869)3月3日生 千葉出身 大正5年医術開業試験及第 明治44年着任(43歳・助手) 内科小児科 従事年数1-5年(4年).

⑤大正2年(1913)(大正2年から5年までは医局代表者2名が記され本年度は木澤・河野)

**河野政吉** 明治11年(1878)2月1日生 明治37年京都医専卒 明治45年着任(35歳・医員) 内科 従事年数2-4年(2年). 「京都市大矢病院内科担任後, 大阪胃腸病院ニ一ヶ年勤務次で京都東寺済生病院ニ女子部内科二年間担任 大正3年現地開業<sup>21)</sup>」.

⑥大正3年(1914)(医局代表は木澤・河野)

⑦大正4年(1915)(医局代表は木澤・山口)

⑧大正5年(1916)(医局代表は山口・松崎)

**松崎清博** 明治23年(1889)9月20日生 富山出身 大正2年金沢医専卒/昭和11年学位受領(京大) 大正4年着任(27歳・医員) 内科小児科 従事年数3年. 「卒業後県立金沢病院ニ勤務同3年ヨリ大正7年8月迄京都済生病院ニ勤務同7年現地開業<sup>22)</sup>. 学位論文「内臓感覚の研究」<sup>23)</sup>」.

⑨大正6年(1917)(本年度以降医員の連名に戻る)

**片山虎男** 大正5年着任 従事年数4年. 詳細不明.

**佃要** 明治24年(1891)8月25日生 山口出身 大正5年熊本医専卒 大正5年着任(26歳・医員) 内科小児科 従事年数1年. 「卒後南満医学堂助手 京大眞下内科教室等ニテ研究 昭和4年現地開業<sup>24)</sup>」.

⑩大正7年(1918)

**内海元一郎** 明治26年(1893)3月生 福井出身 大正5年金沢医専卒/大正13年学位受領(京

大) 大正6年着任(25歳・医員) 内科 従事年数2年。「卒後京大医学部病理教室勤務 元内科副手 高知県生戸町共愛病院<sup>25)</sup>。」

⑩大正8年(1919)(本年度初出の医師氏名無し)

⑪大正9年(1920)

**鈴木正雄** 明治26年(1893)11月7日生 宮城出身 大正6年京都医専卒 大正8年着任(27歳・医員) 従事年数4年。「八條大宮西入濟生病院<sup>26)</sup>。」

⑫大正10年(1921)

**保科龍** 生年月日不明 島根出身 大正9年京都医専卒 卒後1年で着任 従事年数1年。

⑬大正11年(1922)

**杉田正臣** 明治32年(1899)5月30日生 大正11年京都医専卒 宮崎出身 大正10年着任(23歳・医員) 眼科 従事年数2年。「卒後母校眼科教室ニテ研究後兵庫県公立豊岡病院眼科ニ勤務次デ母校眼科教室及び病理学教室ニテ再研究<sup>27)</sup>。」

⑭大正12年(1923)(本年度初出の医師氏名無し)

⑮大正13年(1924)

**渡邊卓郎**(『日本医学博士録』には渡部卓郎で掲載) 生年月日不明 大正9年京大卒/大正14学位受領(京大)(卒後4年, 大正12年着任) 従事年数2年。「学位論文「胎児と成熟動物血液の比較研究」<sup>28)</sup>。島根県米子博愛病院長<sup>29)</sup>。」

**中川直矢** 明治32年(1899)3月29日生 京都出身 大正12年京都医専卒/昭和20年学位受領(京大) 大正12年着任(25歳・医員) 内科小児科 従事年数2-4年(4年)。「卒後母校及び京大で研究 昭和三年開業<sup>30)</sup>。」

⑯大正14年(1925)

**横田宗正** 明治31年(1898)3月19日生 大正12年京都医専卒/昭和10年学位受領(京大) 外科 大正13年着任(27歳・医員) 外科 従事年数1-3年(3年)。「卒業後神戸市立及び北里研究所ニ研究同14年3月より京大島口外科教室ニ入り現在研究中昭和3年10月傍ラ現地開業<sup>31)</sup>。学位論文「肺炎双球菌アナワクチンの免疫学的研究」<sup>32)</sup>。」

⑰大正15年(昭和元年)(1926)(本年度の広告無し)

10月28日小林死去・12月25日大正天皇崩御

⑱昭和2年(1927)(同上)

⑲昭和3年(1928)

**西谷宗雄** 明治26年(1893)10月18日生 高知出身 大正8年京大卒/大正15年学位受領 昭和2年着任(35歳・院長) 小児科 従事年数・院長1年(顧問10年)。「卒業後母校小児科教室ニ勤務同10年ヨリ12年12月迄支那天津日本共立病院勤務 同13年ヨリ15年迄京大大学院ニ在学同15年6月学位受領以来現地開業<sup>33)</sup>。昭和12年12月12日死亡 学位論文「赤血球の超生体可染物質に関する実験的研究」<sup>34)</sup>。」

**入江栄一郎** 明治25年(1892)9月26日生 岡山出身 大正8年京大卒/昭和3年学位受領(京大) 昭和2年着任(36歳・医員) 内科 従事年数医員1年・院長5年・(顧問11年)。「濟世病院 卒後京大大学院ニ入学昭和3年4月当病院院長トシテ就任 同年1月医博ノ学位受領<sup>35)</sup>。濟生病院 卒業後京大大学院ニ入学昭和3年4月当病院々長トシテ就任<sup>36)</sup>。八條大宮西入濟生会京都病院(ママ) 学位論文「酵素非働経過の研究」<sup>37)</sup>。」

**松永清夫**(年齢不詳・卒後3年) 大阪出身 大正14年京大卒(卒後3年, 昭和2年着任) 内科 従事年数3年。

**西原賢一** 明治33年(1900)1月3日生 広島出身 大正13年京都医専卒/昭和3年府立医大卒 昭和2年着任(28歳・医員) 産婦人科外科 従事年数2年。「卒後, 兵庫県加古川町奥産婦人科病院大正14年4月マデ 同年5月ヨリ同15年4月まで岡山見倉敷町中央病院産婦人科ニ勤務 同年(5月)ヨリ昭和2年6月ヨリ(までカ)京大産婦人科教室 自同2年7月至4年3月東寺濟世会病院(ママ) 婦人科担当 同年4月現地開業<sup>38)</sup>。卒後倉敷中央病院京都東寺濟生病院等勤務<sup>39)</sup>。」

⑳昭和4年(1929)

**眞下俊一** 明治21年(1888)4月26日生 兵庫出身 大正元年京大卒/大正10年学位受領(京大) 昭和3年着任(41歳・顧問) 内科 従事年数(顧問17年)。「大正9年(1920)京大助教授, 同13年内科学教授, 昭和2年(1926)日本内科学総会講演会において心音図及び心音拡声を披

露. 同10年日本循環器学会創設. 同20年9月17日広島原爆被害者調査に出張中, 大野原陸軍病院において山津波に遭遇, 死去. 行年57歳<sup>40</sup>.」

**安岡忠雄** 明治33年(1900)2月22日生 愛媛出身 大正14年京大卒/昭和5年学位受領(京大) 昭和3年着任(29歳・医員) 内科 従事年数2年. 「瀧宮病院院長内科 卒後母校内科教室ニテ研究後和歌山県組合立新宮病院院長歴任 昭和24年9月現院長ニ就任<sup>41</sup>. 学位論文「蛙心臓の心室内圧及容積の關係に就いて」<sup>42</sup>.」

**森川賢一** 前年(昭和3年)の広告に西原賢一として掲載された. 京都医専・府立医大卒業名簿に森川賢一の名前はない.(西原賢一は掲載されている)

②昭和5年(1930)

**高木秀夫** 生年月日不明 長野出身 昭和4年着任(年齢不明・医員) 産婦人科・外科 従事年数1年.

③昭和6年(1931)

**吉川舜二**(医学士) 明治26年(1893)3月13日生 岡山出身 大正7年京都医専卒 昭和5年着任(38歳・医員) 内科 従事年数3年. 「卒後岡山見久米郡ニテ開業 昭和3年8月ヨリ現地(京都)ニ転ジ開業<sup>43</sup>.」

④昭和7年(1932)

**濱名驥** 明治37年(1904)8月21日生 福井出身 昭和6年慶大卒/昭和19年2月学位受領(京大) 昭和6年着任(28歳・医員) 内科 従事年数2年. 「高濱病院 卒後京大眼科教室大阪刀根山病院見学 次イデ京大衛生学教室及神戸市技師勤務同21年現病院長就任<sup>44</sup>. 論文「近視と生活環境との關係に就て(京大衛生学教室)」<sup>45</sup>.」

⑤昭和8年(1933)(本年度初出の医師氏名無し)

⑥昭和9年(1934)

**山田憲吉** 明治32年(1899)7月7日生 愛知出身 昭和2年府立医大卒 昭和8年着任(35歳・院長) 産婦人科 従事年数5年. 「卒後母校(附屬療病院産婦人科教室至現在<sup>46</sup>. 京都市東寺済生病院<sup>47</sup>.」

**山田一夫** 明治23年(1890)6月3日生 愛知出身 大正5年京大卒/大正14年学位受領(京大)

昭和8年着任(44歳・顧問) 産婦人科 従事年数11年. 「大正6年京大産婦人科入局・大学院, 同8年講師, 同11年助教授を経て同14年京都府立医大産婦人科教授, 昭和28年定年退職<sup>48</sup>. 学位論文「麻醉に関する知見補遺: 殊に出血時に於ける研究」<sup>49</sup>. 京都府立医科大学教授山田一夫講述 助手吉川舜二(前出)筆記「クル病性狭窄骨盤に於ける帝王切開」<sup>50</sup>.」

**富澤宗爾** 明治38年(1905)3月7日生 石川出身 昭和5年府立医大卒 昭和8年着任(29歳・医員) 内科 従事年数4年. 「明石市 明石病院院長<sup>51</sup>.」

**平間良子** 昭和8年着任(医員) 従事年数1年. 詳細不明.

⑦昭和10年(1935)

**宮谷保文** 明治31年(1898)3月20日生 京都出身 大正12年京都医専卒 昭和9年着任(37歳・医員) 内科(性科) 従事年数4年. 「卒業後京都府立療病院内科勤務大正15年10月辞任同町八坂病院ニ奉職昭和3年10月辞任同時ニ現地開業<sup>52</sup>. 性科 済生病院<sup>53</sup>.」

⑧昭和11年(1936)(本年度初出の医師氏名無し)

⑨昭和12年(1937)(同上)

⑩昭和13年(1938)

**森尚文** 明治43年(1910)9月20日生 京都出身 昭和10年府立医大卒 昭和12年着任(28歳・医員) 産婦人科 従事年数4年. 「舞鶴市 舞鶴共済病院<sup>54</sup>.」

⑪昭和14年(1939)

**川口英夫** 明治28年(1895)10月22日生 徳島出身 大正11年京大卒/昭和13年学位受領(京大) 昭和13年着任(44歳・院長) 産婦人科 従事年数3年. 「内外産科 川口医院<sup>55</sup>. 学位論文「鉛コロイドの悪性腫瘍発育放射線感受性に及ぼす影響, 並にそれに対する紫外線葡萄糖の作用に就いて」<sup>56</sup>.」

**渡邊亨** 明治43年(1910)3月1日生 埼玉出身 昭和10年京大卒/昭和16年学位受領(京大) 昭和13年着任(29歳・医員) 内科 従事年数2年. 「卒後京大附属眞下内科勤務 昭和10年3月大学院入学 同15年5月京都市立六條保健所勤務

同17年10月中島飛行機小泉病院勤務 同20年現地開業<sup>57)</sup>。論文「東洋医学に於ける診察法」<sup>58)</sup>。」

③②昭和15年(1940)(本年度初出の医師氏名無し)

③③昭和16年(1941)

**幸寺武** 生年月日他詳細不明 昭和15年着任(医員) 従事年数1年。

③④昭和17年(1942)(本年度以降、院長名が記されない)

**石坂英夫** 明治41年(1908)5月16日生 新潟出身 昭和9年京大卒/昭和19年学位受領(京大) 昭和16年着任(34歳・医員) 産婦人科 従事年数1年。「前橋市 前橋赤十字病院 産婦人科医長<sup>59)</sup>。」

**石田芳蔵** 大正2年(1913)3月24日生 山梨出身 昭和3年京大卒/昭和20年学位受領(京大) 昭和16年着任(29歳・医員) 従事年数2年。「済生会大月病院 院長 卒後母校ニテ研究 以来現院就任 郡医会監事<sup>60)</sup>。学位論文「温浴の人体毛細血管に及ぼす影響」<sup>61)</sup>。」

**水谷政市** 明治40年(1907)8月23日生 三重出身 昭和11年大阪高医専卒/昭和20年学位受領(京大) 昭和16年着任(35歳・医員) 内科小児科 従事年数3-5年(3年)。「卒後京大真下内科教室デ研究後、昭和19年10月現病院長ニ就任(済生会松阪病院) 学位論文「上下肢血管ノ反応比較」<sup>62)</sup>。済生会松阪病院 院長水谷政市「私の歩んだ道」<sup>63)</sup>。」

③⑤昭和18年(1943)

**入部兼道**(年賀広告には兼造とあるが正しくは「兼道」) 明治42年(1909)1月25日生 鹿児島出身 昭和7年京大卒/昭和20年学位受領(京大) 昭和17年着任(34歳・医員) 婦人科 従事年数1年。「入部兼道 卒後母校副手 日赤和歌山支部病院 島根県濱田町興仁会病院産婦人科部長歴任 学位論文「妊娠分娩の感覚ノ研究」<sup>64)</sup>。」

**大前章** 明治42年(1909)12月25日生 京都出身 昭和10年慈恵医大卒同年京大耳鼻咽喉科教室入局/昭和19年学位受領(京大) 昭和17年着任(34歳・医員) 耳鼻咽喉科 従事年数2-4年(2年)。「昭和10年京大耳鼻咽喉科教室入局同18年第53師団衛生隊見習士官 ビルマ方面従

軍 同22年京大耳鼻咽喉科教室婦局 同32年京都鉄道病院耳鼻咽喉科医長 同44年開業 学位論文「聾啞の平衡機能に関する研究」<sup>65)</sup>。」

**杉並亮** 明治41年(1908)6月5日生 奈良出身 昭和13年京大卒/昭和35学位授与(京大) 昭和17年着任(35歳・医員) 産婦人科 従事年数1年。学位論文「低蛋白食の雌性白鼠生殖能に及ぼす影響に関する実験的研究」<sup>66)</sup>。

③⑥昭和19年(1944)

**森川橘一** 大正2年(1913)4月14日生 大阪出身 昭和13年京大卒/昭和35年学位受領(京大) 昭和18年着任(31歳・医員) 産婦人科 従事年数1-3年(1年)。「卒後米子市博愛病院勤務 昭和21年7月現地開業<sup>67)</sup>。母校解剖学教室に研究 昭和35年3月学位受領<sup>68)</sup>。」

**池田令太郎** 昭和18年着任(医員) 従事年数1-3年(1年)。詳細不明。

③⑦昭和20年(1945)(本年度の広告は院主名のみで医師名無し)

**院主 清瀧英弘** 外職員一同。

③⑧昭和21年(1946)(同上) 終戦後病院閉鎖

**院主 清瀧英弘** 外職員一同。

## 2. 年賀広告より確定できない 従事年数の推定

前章では広告に連続して医師氏名が載っている期間を従事年数としたが、次の理由により広告から確定できない場合は「最短-最長年数(推定年数)」と記した。

(1) 大正2年から5年までは医員全員ではなく医局代表者2名のみが広告に記された。(2) 大正15年と昭和2年は『六大』に広告が掲載されなかった。(3) 昭和20年21年は院主(清瀧英弘)単名で広告が掲載された。

推定した従事期間の根拠を述べる。表1、表2は年賀広告より各医師の従事年数をまとめたものである。表内の○は医師(院長・医員)として従事した年度、◎は顧問として従事した年度、△・(△)は前記(1)-(3)の場合で、△は周囲の状況から在職中と筆者が推定した年度、(△)は既に退職し在職していないと推定した年度を表して

表1 年賀広告より推定した各医師の従事年数 (明治・大正時代)

	明治42年	43年	44年	45年	大正2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	
小林参三郎	47歳	○院長 (助手)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
稲垣尾善	不明																		
善橋正治	25歳																		
山岡弘光	28歳																		
山本龜治郎	26歳																		
柚澤亮白		26歳	○																
永田傳之助	41歳																		
小室経雄		31歳	○																
木澤長壽		29歳	○																
山口栄		27歳	○																
松山勇太郎		38歳	○																
多田文太		43歳	○																
河野政吉																			
松崎清博																			
片山彦男																			
伊藤																			
内藤正一郎																			
鈴木正雄																			
保科隼																			
杉田正臣																			
渡邊卓郎																			
中川直矢																			
榎田宗正																			
榎田宗正																			

いる。

△を記したのは5名で顧問を除き医員に限れば3名である。(△)を記したのは7名(助手の多田文太は重複する)で、△・(△)9名の医員(助手を含む)について年代順に従事年数を推定した根拠を述べる。

小屋と松山は明治45年の広告に氏名が記され44年の入職と思われる。しかし大正2年の広告

表2 年賀広告より推定した各医師の従事年数 (昭和時代)

	昭和12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年
中川直矢	△									
榎田宗正	△									
西谷宗雄	35歳									
入江栄一郎	36歳									
松永清夫	卒後3年									
西原賢一	28歳									
夏下俊一	41歳									
安岡忠雄	29歳									
(森川賢一)										
高木秀夫	卒後1年									
吉川舜二	38歳									
濱名群	28歳									
山田善吉	35歳									
山田一夫	44歳									
野澤崇徳	29歳									
野田良子	不明									
宮谷悦文	卒後1年									
森向文	37歳									
川口英夫	卒後1年									
渡邊亨	28歳									
幸寺武	44歳									
石坂英夫	29歳									
石田芳蔵	不明									
水谷政一	34歳									
入部兼道	34歳									
大前章	35歳									
杉並亮	31歳									
池田令太郎	不明									

に代表者として年長の河野と共に名前が載ったのは小屋や松山より若い31歳の木澤である。年齢から考えれば本来小屋か松山が代表者となっただけであり両者は同2年には既に退職していると推察される。一方、明治44年に43歳で入職した多田は広告の肩書きが助手で医員と区別されている。この場合の助手は当時大学において制度で規定された職種の助手や副手ではなく<sup>69)</sup>、医術開

業試験受験前に病院で医員の補助業務をしていたのではないだろうか。多田は試験に及第した大正5年頃には退職したと推察される。また同4年には木澤と共に31歳の山口が代表者になった。木澤が家庭の都合で同4年6月に退職し<sup>70)</sup>、木澤に替わり翌5年に27歳の松崎が代表者として記された。

大正15年と昭和2年の『六大』には広告が掲載されなかったのは、大正天皇崩御と小林死去の影響だろう。渡邊が大正14年9月に博愛病院院長に迎えられ退職し、小林が急逝した大正15年に医員として在職していたのは中川と横田である。二人は共に京都医専卒業後京大での研究歴があり大学と関連した人事により病院に従事していたのかもしれない。もし、そうであれば昭和2年に京大出身の院長・西谷や医員入江・松永、府立医専卒業後京大産婦人科に所属した西原らが入職するまで医員として従事していただろう。

太平洋戦争中の昭和17年から理由は不明だが院長名が記されなくなり、終戦直前の同20年・21年の広告は院主清瀧英弘の単名で掲載された。この2年間は戦争の影響で病院として機能しなかった可能性があり、同19年の広告に氏名が記された水谷・大前・森川・池田らは翌年以降は従事できなかったのではないだろうか。

以上より9名の医師（助手1名を含む）の従事年数を、小屋1年、松山1年、（多田4年）、中川4年、横田3年、水谷3年、大前2年、森川1年、池田1年と推定した。尚、これらはいくまで史料からの推察であり、ご遺族・ご関係者で正確な史実をご存知の方は是非ご教示ご訂正いただきたい。

### 3. 前期（小林院長時代）と後期（西谷院長時代以降）に従事した医員記録の比較

明治42年の開院から昭和21年の閉院までを小林が院長をしていた前期とそれ以後の後期に分ける。歴代院長は小林参三郎、西谷宗雄、入江栄一郎、山田憲吉（主任教授の山田一夫と区別するため以下も姓名を記す）、川口英夫である。現在ではあまり顧みられることのない濟世病院である

が、小林個人史の研究という文脈において病院は今も歴史上に存在している。しかし、小林が院長の時代は病院が存在した38年間のうちの前半17年間で、むしろ期間としては小林死去後の後期の方が長く西谷（1年）、入江（5年）、山田憲吉（5年）、川口（3年）が短期間で交替して院長を務めた。また後期には院長とは別に京大出身の4人の顧問が存在し病院運営への影響力は院長より大きかったと思われる。本章では、これまでまとめた病院に従事した医員達の記録を、いくつかの項目について前期と後期を比較する。尚、助手2名（稲垣・多田）と各項目について史料から判断できない場合は検討対象から除いた。

#### (1) 出身校

院長・顧問以外の医員達の出身校は不明者2名（片山・平間）を除くと、前期（小林時代）は京都医専11名・金澤医専3名・京大2名・大阪高医1名・岡山医専1名・熊本医専1名、合計19名である。後期の西谷時代は京大2名・京都医専1名、入江時代は京大2名・京都医専1名、慶応大1名、山田憲吉時代は府立医専（府立医大）3名、川口時代以降は京大6名、大阪高医1名、慈恵医大1名で、後期を集計すると京大10名、京都医専（府立大学）5名、慶応大学1名、慈恵医大1名、大阪高医1名、合計18名である。出身校の比較では前期は府立医専が、後期は京大が半数を占めた。尚、小林（米国クーパー医科大）・山田憲吉（府立医大）以外の院長・顧問は全員京大出身である。

#### (2) 入職時年齢と従事年数（従事年数は一部推定を含む・前章参照）

医員の入職時年齢と従事年数を前期と後期で比較する。史料から前後期の平均値と標準偏差を求めると、前期の入職時年齢は $28.6 \pm 4.9$ 歳（17）平均 $\pm$ 標準偏差（人数）で従事年数は $2.6 \pm 2.7$ 年（20）である。一方、後期は $32.1 \pm 3.5$ 歳（16）、従事年数 $2.0 \pm 1.1$ 年（21）である。平均値で比較すると入職時年齢は前期では若く従事年数は後期で長い。しかし前期の従事年数の標準偏差が大きく

後期との比較に注意を要する。前期従事年数の標準偏差が大きいのは山口栞の従事年数13年間を他の医員と同列に計算したことによる。山口は27歳で入職し13年間小林のもとで診療し小林の追悼文集に唯一文章を寄せている医師である。大正4年の広告に医局代表と記され史料に病院副院長との記録もある。山口は他の医師達とは別に考えるべきであろう。山口の従事年数13年間を省いて再計算すると前期の医員従事年数は $2.1 \pm 1.2$ 年(19)となり前後期で大きな違いはない。

### (3) 「済世病院」で従事した経歴が史料に記録されている医師

前述したように山口の経歴に「東寺済生病院副院長」の記録がある。同様に済世(済生との誤記を含む)病院で従事した経歴の記録があるのは以下の医師である。(第1章参照)

前期では山本龜治郎「済生病院内科担当一ヶ年奉職」、木澤長寿「済世病院(東寺)ニ勤務」「済生病院(東寺)ニ勤務」、河野政吉「東寺済生病院ニ女子部内科二年間担任」、松崎清博「京都済生ニ勤務」、鈴木正雄「八條大宮西入済生病院」と山口以外に5名の記録が残る。後期では院長以外の医員では西原賢一「東寺済世会病院(ママ)婦人科担当」、宮谷保文「性科 済生病院」の2名である。医員として入職し翌年院長に就任した入江栄一郎の記録には「済世病院院長トシテ就任」「八條大宮西入済生会京都病院(ママ)」「八條大宮西入済生病院」とある。

医員に限ると前期は6名、後期は入江を除くと2名で出身は山口が岡山医専、松崎が金澤医専、他の6名は京都医専出身で、済世病院での従事が経歴に記録された京大出身の医員は一人もない。

### (4) 学位受領者

院長・顧問を除き医員に限って学位受領者数を前後期で比較すると、前期は山岡、梅澤、小屋、松崎、内海、渡邊(卓郎)、中川、横田の8人が、後期は安岡、濱名、渡邊(亨)、石坂、石田、水谷、入部、大前、杉並、森川の10人で、梅澤(授与

は熊本医科大)以外は出身校に関わらず京大で学位を授与された。後期の方が受領者が多く、また前期の受領者も半数近い3名は大正末に入職した医員である。

### 4. 従事医師の推移からみた病院の変遷

前・後期の境が小林が急逝した時期と一致するので、小林の死去を契機に病院の治療や運営方針が転換したような印象を受ける。しかし、実際には大正時代末には小林は診療の第一線を退いていたので<sup>71)</sup>、小林の急逝が病院を変革させた直接的な原因ではないと筆者は考える。前期半ばより小林が心身の不調をきたし、更に小林をめぐる真言宗と真宗の摩擦や真言宗の内部紛争、病院と国・京都府・済生会及び皇室との関係や当時の社会情勢の変化など複雑な状況下で、病院は主事の清瀧を中心に運営された。

前章で前後期の医員について4項目を比較した。前後期の医員の従事年数は共に約2年であるが、後期の方が入職時年齢が高く京大出身者や出身校に関わらず京大で学位を授与された医師が多い。一方、前期は府立医専出身者が中心で入職時年齢は若い。また済世病院で従事した経歴を記録している医員は前期に多い。後期に病院で従事した経歴を記録に残している医員は少なく特に京大出身者(院長に就任した入江は除く)は一人もない。

先に前期を小林院長時代(小林存命時)と定義したが小林は大正時代末には診療の第一線を退いていたので、小林が病院の診療を実際に主導していた時代を前期とする方が従事医師の推移を理解しやすい。後に京大から学位を授与された渡邊卓郎、中川、横田が入職した大正12年頃は既に京大の支援下で診療が行われていたと推察される。その頃の診療は小林の「特殊」な治療方針を否定しないまでも踏襲されなかつたであろう。大正13年には13年間小林の下で従事した山口も退職した。

小林は外科医時代に自身や患者の信仰が病氣治療に不思議な力を与えるという経験をし、その現象を信仰が「V.M.N. (Vis Medicatrix Nature 自然治

癒力)」を呼び起こすものと理解した。小林は治療方針として「物質的（身体的）治療」と「精神的（信仰）治療」の併用を掲げた。彼の精神的治療は患者の「V.M.N.」を呼び起こすことであり<sup>72)</sup>、本質は身体と精神のいずれにも偏らない全人的治療にあった。この治療方針は身体的治療を主とする西洋医学中心の医学・医療界において特殊であり、また病院職員や患者や家族に向けた小林自身の講話や真言宗布教師真井覚深らによる法話会（信仰談話会）が毎月開催され、病院としても「特異」だったと思われる。前期において小林や病院が仏教界だけでなく国や京都府、皇室及び一般人から非常に高く評価されたが<sup>73)</sup>、当時の医学・医療界には受け容れられなかったのだろう。そのためか現在でも近代の医学・医療史において小林や濟世病院に言及されることは希である。

一方、後期の診療面での特徴は「顧問」の存在である。小児科の西谷は院長を1年務めた後顧問となり同時に京大内科教授の真下が顧問に就任した。次期院長の入江も5年後顧問となり院長は産婦人科の山田憲吉に替わり、彼が在籍していた府立医大産婦人科教授で京大出身の山田一夫が顧問に就任した。顧問はすべて京大出身者であり特に真下と山田一夫は大学教授である。病院の治療方針が顧問により指導されたことは想像に難くない。前期より年齢のやや高い中堅医師が医員として従事し診療は安定したと思われるが、小林の治療方針は転換され病院の特異性も失われたと推察される。真言宗布教師真井の法話会も昭和4年が最後となった。

医員達と院長や顧問との関係を考えてみたい。前期において小林の技術や治療方針に賛同して入職した医員達は自らの経歴に濟世病院の名前を残したのだろう。また小林も心身に不調をきたす迄は、若い医員達を指導し共に患者治療を行い小林と医員達は臨床医として師弟関係にあったと思われる。一方、後期に病院で従事した医員は自らの希望というより大学の指示による入職ではないだろうか。京大が病院を支援した理由は国や京都府や皇室といった力が働いたのかもしれない。世間的にいくら評判が良くても大学教授の真下や山田

一夫が小林の特殊な治療論を受入れたとは考え難い。後期の医員達は出身校が京大であれ他学であれ、彼らの目的は京大での研究であり濟世病院で従事したことを経歴として残す必要はなかったと思われる。医員と顧問は臨床と共に研究者として師弟関係にあり、治療は大学で教えられた西洋医学による通常の医療が行われたと推察される。

病院の京大へ接近は小林死去後に始まったのではない。小林は自らの心身の不調や真言宗と真宗の摩擦などに疲れ大正4年2月に突然職務を離れ外遊に出てしまう<sup>74)</sup>。2-3箇月の予定だったが結局帰朝したのは10月だった<sup>75)</sup>。その間に第一部長の木澤が家庭の事情で6月に退職した。主事の清瀧は東大出身の医学士との間で交渉をまとめたが突然断られ、急遽、京大出身（明治40年卒業）の開業医山口六郎（明治44年開業）を7月1日付で院長代理として招いた<sup>76)</sup>。ところが同年10月31日に小林が帰朝し11月17日病院に復帰したため山口は病院を辞した。

さて、「濟世病院」は史料に「濟生」と誤記されることが多い。例えば前章でも紹介したが「東寺濟生病院副院長」（山口）、「濟生病院内科」（山本）、「東寺濟生病院女子部」（河野）、「京都濟生」（松崎）、「濟生病院」（鈴木）、東寺濟生会病院婦人科（西原）、「濟生会京都病院」（入江）などの記録があり正式名称の「濟世病院」と記されることの方がむしろ少ない。緒言に「（濟生会は）後に濟世病院と交流することになるが病院開設には何ら関与していない」と記したが、その後、前期において濟世病院は濟生会の京都での活動を補う献身的な働きをし<sup>77)</sup>、皇室や国（内務省）から非常に高く評価され高額な下賜金・助成金が下付された。名称を「濟生」と誤記されるのは同音という理由だけでなく両者の関わりが次第に強くなったことによるのかもしれない。また濟世病院は終戦直後米軍の指示で閉鎖されたとも言われ<sup>78)</sup>、戦後意識的に濟世病院の名称が使われなかった可能性もある。

後期の従事者に後年恩賜財団濟生会病院の院長に就任した医員が2名いた。濟生会大月病院の石田芳蔵と濟生会松阪病院の水谷政市である。両者

は真下が主任教授の京大第三内科に属し昭和16年に済世病院に入職した。昭和20年、共に京大から学位を授与され後に済生会病院院長に就任した。京大医学部と済生会病院の関係を考えるうえで貴重な記録である。現在でも各地の済生会病院は京大医学部の関連病院として連携関係にある。済世病院と恩賜財団済生会は設立母体も設立の経緯も全く異なるが、済世病院と済生会は「済世利民」「国民利福」の精神を共有していたのだろう。

### おわりに

本稿では済世病院が存在した38年間に従事した医師達を紹介し、医員と院長や顧問との関係や医員達の推移と治療方針や病院運営の変遷との関連などについて考察した。

小林院長時代を前期、それ以降を後期と分けると前期は小林を中心に若い医師達と共に仏教教義である「心身不二」に基づいた物質的(身体的)治療と精神的治療(信仰治療)の併用を治療方針に掲げ病院が運営された。しかし前期半ばより諸々の理由で小林は診療の第一線を退き病院は京

大の支援を受けるようになった。後期は京大出身の顧問に診療方針が委ねられたと思われる。医員は前期より年齢が少し高く京大出身者や他学出身でも京大に所属し研究している中堅の医師が多くなり、後期の診療は身体的治療を中心とした通常の西洋医学により行われたと思われる。

院長・顧問を含む従事医師が前期から後期へ推移するにつれて、京大の支援下で診療や病院運営は安定したが、小林の特殊な治療論に基づく診療や定期的な仏教法話会の開催などの病院の特異性が失われたと思われる。済世病院が閉鎖後に、かつて病院で従事した2人の医員が済生会病院院長に就任した。現在でも済生会病院は京大医学部の関連病院として連携関係にあるが両者を繋いだのが済世病院だったかもしれない。済世病院と恩賜財団済生会の関係については今後の研究課題としたい。

現在ではあまり顧みられることのない済世病院だが、明治から昭和にかけて激動した社会の医療界において非常に貴重な存在だったと筆者は考える。

### 付録：『六大新報』に掲載された東寺済世病院の年賀広告<sup>79)</sup>

#### ①明治四十二年「謹賀新年」

(済世病院開院は明治42年9月で年賀広告は翌年から掲載された。当時の祖風宣揚会の中心構成員を紹介する目的で当年を加えた。)

本会々員并に読者各位の御清福を祈り併せて人法の為益々御奮闘あらんことを奉希望候

己酉元旦 祖風宣揚会 六大新報社

「賀正」(祖風宣揚会)

会長 土宜法龍

名誉会長 鎌田観應

副会長 塩崎琢修

「謹賀新年」

理事 石堂慧猛・長谷宝秀・清瀧智龍

#### ②明治四十三年「謹賀新年」

本病院も高祖の御冥鑑と大方の御賛襄とにより追日隆盛に向ひ聊か済世の実を挙げ居り候間御同喜被下度尚本年は大発展仕度準備中に有之

候に付萬事御庇護の程奉希望候

済世病院

院主 矢野長藏

院長 小林参三郎

主事 清瀧智龍

医員 山岡弘光・山本亀治郎

#### ③明治四十四年「謹賀新年」

本病院も高祖の御冥護と大方篤志者の御援助により追日隆盛に向ひ今春早々より男子部をも開設仕度、目下建築工事も大半落成罷在候益々奮励院務を拡張し済世の実を挙げ以て祖風を宣揚仕度候に付本年も倍旧の御庇護の程奉希望候

済世病院

院主(矢野)・院長(小林)・主事(清瀧)

医員 梅澤亮吉・永田梅之助

#### ④明治四十五年(大正元年)「謹賀新年」

開院後僅々二年有半の短日月を経ざる本院も今や

日本仏教界唯一の模範病院と目せらるゝに至りたるは全く高祖大師の御冥護と大方篤志者の御援助の致す所と奉感謝候。本年も一大発展仕度、目下其準備中に有之候に付不変倍旧の御庇護の程奉希望候敬具

濟世病院

院主（矢野）・院長（小林）・主事（清瀧）

医員 小屋經雄（医学士）・木澤長壽（同）・山口栗・松山勇太郎・多田文太（助手）

⑤大正二年「<sup>りょうあん</sup>諒闇中ニ付年賀欠礼」

（前略）目下第三病舎増築ノ設計中ニ有之候、不相変倍旧ノ御援助ノ程奉希望候

濟世病院

院主（矢野）・院長（小林）・主事（清瀧）

医局代表者 木澤長壽・河野政吉

⑥大正三年「謹賀新年」

（挨拶文省略）

濟世病院

院主（矢野）・院長（小林）・主事（清瀧）

医局代表者 木澤長壽・河野政吉

⑦大正四年「謹迎賀新年」

（挨拶文省略）

濟世病院 京都東寺 電話下四九一番

院主（矢野）・院長（小林）・主事（清瀧）

医局代表者 木澤長壽・山口栗

⑧大正五年「謹賀新年」

（挨拶文省略）

濟世病院 京都東寺 電話下四九一番

院主（矢野）・院長（小林）・主事（清瀧）

医員代表者 山口栗・松崎清博

⑨大正六年「謹賀新年」

（挨拶文省略）

濟世病院 京都東寺 電話下四九一番

院主（矢野）・院長（小林）・主事（清瀧）

医員 山口栗・松崎清博・片山虎男

佃要

⑩大正七年「謹賀新年」

（前略）本院事業も追次確實と相成り殊に昨冬皇后陛下御使御差遣の光榮に浴し感激措く能わず一層努力事業の発展を計り以て御懿旨に奉答度画策中に有之候間不相変御援助の程奉希望候

京都濟世病院

院主（矢野）・院長（小林）・主事（清瀧）

医員 山口栗・松崎清博・片山虎男・内海元一郎

⑪大正八年「謹賀新年」

（前略）本院事業も追次確實と相成り殊に本年は創立満十週年を相迎え候に付ては財団法人組織と為し永久的基礎の強固と事業の発展とを計り度候間不相変御援助の程奉希望候

京都濟世病院

院主（矢野）・院長（小林）・主事（清瀧）

医員 山口栗・片山虎男・内海元一郎

⑫大正九年「謹賀新年」

（挨拶文省略）

京都濟世病院

院主（矢野）・院長（小林）・主事（清瀧）

医員 山口栗・片山虎男・鈴木正雄

⑬大正十年「謹賀新年」

（挨拶文省略）

京都濟世病院（前年4月25日に矢野院主死去）

院長 小林参三郎

主事 清瀧智龍

医員 山口栗・鈴木正雄・保科龍

⑭大正十一年「謹賀新年」

（挨拶文省略）

京都濟世病院

院長 小林参三郎

主事 清瀧智龍

医員 山口栗・鈴木正雄・杉田正臣

⑮大正十二年「謹賀新年」

（挨拶文省略）

京都濟世病院

院長（小林）・主事（清瀧）

医員 山口栗・鈴木正雄・杉田正臣

⑯大正十三年「謹賀新年」

客年中ハ多大ノ御同情ヲ辱シ奉感謝候本モ不相変御援助之程奉希望候、尚時節柄年賀状ハ一々差上申候間不悪御諒承願上候

京都濟世病院

院長（小林）・主事（清瀧）

医員 山口栗・渡邊卓郎・中川直矢

## ⑰大正十四年「謹賀新年」

院長(小林)・主事(清瀧)

医員 渡邊卓郎・中川直矢・横田宗正

## ⑱大正十五年(昭和元年)

(年賀広告無し)10月28日に小林死去・12月25日に大正天皇崩御

## ⑲昭和二年「諒闇に付き年賀を欠礼仕候」

(同上)

## ⑳昭和三年「謹賀新年」

(以降、挨拶文無し)

京都济世病院

院主 清瀧智龍

院長 西谷宗雄(医学博士)

内科 入江栄一郎(同)

内科 松永清夫(医学士)

産婦人科・外科 西原賢一(京都医学士)

## ㉑昭和四年「謹賀新年」

京都济世病院

院主 清瀧智龍

院長 入江栄一郎(医学博士)

顧問 眞下俊一(同)・西谷宗雄(同)

内科 松永清夫(医学士)・安岡忠雄(医学士)

産婦人科・外科 森川賢一(京都医学士)

## ㉒昭和五年「謹賀新年」

京都济世病院

院主(清瀧)・院長(入江)・顧問(眞下・西谷)

内科 松永清夫(医学士)・安岡忠雄(同)

産婦人科・外科 高木秀夫(医学士)

## ㉓昭和六年「謹賀新年」

京都济世病院

院主(清瀧)・院長(入江)・顧問(眞下・西谷)

医員 吉川舜二(医学士)

## ㉔昭和七年「謹賀新年」

京都济世病院

院主(清瀧)・院長(入江)・顧問(眞下・西谷)

医員 吉川舜二(医学士)・濱名隼(同)

## ㉕昭和八年「謹賀新年」祝六大新報一千五百号発行

京都济世病院

院主(清瀧)・院長(入江)・顧問(眞下・西谷)

医員(吉川・濱名)

## ㉖昭和九年「謹賀新年(年)」

京都济世病院

院主 清瀧智龍

院長 山田憲吉

顧問 眞下俊一(医学博士)・西谷宗雄(同)・山田一夫(同)・入江栄一郎(同)

医員 富澤宗爾(医学士)・平間良子(同)

## ㉗昭和十年「謹賀新年」

京都济世病院

院主(清瀧)・院長(山田)・顧問(眞下・山田・西谷・入江)

医員 富澤宗爾(医学士)・宮谷保文(同)

## ㉘昭和十一年「謹賀新年」

京都济世病院

院主(清瀧)・院長(山田)

顧問 山田一夫(医学博士)・西谷宗雄(同)・入江栄一郎(同)

医員(富澤・宮谷)

## ㉙昭和十二年「謹賀新年」

京都济世病院

院主(清瀧)・院長(山田)・顧問(山田・西谷・入江)

医員(富澤・宮谷)

## ㊀昭和十三年

「謹賀新年」祝皇軍大捷・祈武運長久

京都济世病院

院主(清瀧)・院長(山田)・顧問(山田・西谷・入江)

医員 宮谷保文(医学士)・森尚文(同)

㊁昭和十四年「謹賀新年」<sup>しよくとうせいじゅばんざい</sup>祝 禱聖寿万歳・国威宣揚

京都济世病院

院主兼主事 清瀧智龍

院長 川口英夫(医学博士)

顧問 眞下俊一(医学博士)・山田一夫(同)・入江栄一郎(同)

医員 宮谷保文(医学士)・森尚文(同)・渡邊亨(同)

㊂昭和十五年<sup>せいじゅばんざい</sup>「聖寿万歳・国威宣揚」奉祝皇紀二千六百年

京都济世病院

院主兼主事（清瀧）・院長（川口）・顧問（眞下・山田・入江）

医員 森尚文（医学士）・渡邊亨（同）

㉓昭和十六年「大政翼賛・文章報国」紀元二千六百一年

京都濟世病院

院主兼主事（清瀧）・院長（川口）・顧問（眞下・山田・入江）

医員 森尚文（医学士）・幸寺武（同）

㉔昭和十七年「皇軍必勝・聖戦完遂」

京都濟世病院

院主兼主事 清瀧英弘

顧問（眞下・山田・入江）は前年同

医員 石坂英夫（医学士）・石田芳蔵（同）・水谷政市（同）

㉕昭和十八年「捨身敢闘・職域奉公」

京都濟世病院

院主兼主事（清瀧英弘）・顧問（眞下・山田・入江）

医員 石田芳蔵（医学士）・水谷政市（同）・入部兼造（同）・大前章（同）・杉並亮（同）

㉖昭和十九年（年賀文はなく職員名のみ）

京都濟世病院

院主兼主事（清瀧英弘）・顧問（眞下・山田・入江）

医員 森川梢一（医学士）・水谷政市（同）・池田令太郎（同）・大前章（同）

㉗昭和二十年（挨拶文はなく院主名のみ）

京都濟世病院

院主 清瀧英弘 外職員一同

㉘昭和二十一年（同）

京都濟世病院（本年病院閉鎖）

院主 清瀧英弘 外職員一同

## 注

1) 計画の事業、六大新報（以下「六大」と略す）1909；315：2 新聞発行も病院開設と同様に宣揚会の社会事業の一つであり「六大」が創刊された。

2) 病院の命名。「六大」前掲（注1）誌：9 濟世病院の名称について清瀧智龍は「我等の計画せる病院に命名せざるべからず、或は何、或は何と種々の名称は提出されしも世を濟い人を救うの意よりして、終に濟世病院と命名することに決したりしは昨冬（明治41年1908）12月末なりき」と記しているが、既に同年6月発行の「六大」に寄稿した文中で「濟世利民は大師の本願にして、国民利福は大師の生命たり。潤水一杯、朝に命を支え、其の行う所は悉く濟世利民のみ。薜羅一衣、夕に寒を凌ぎ、其の為す所は全く国民利福のみ。」と述べている。（清瀧智龍、大師の濟世。「六大」1908；250：13-14）清瀧にとって「濟世利民・国民利福」は弘法大師の本質であり、病院開設を計画した時点で決めていた名称だろう。一方、濟生会の名称の由来は「この濟生の文字は中国の古典である易経、書経に拠つたものと拝し、殊に易経の繫辭伝に「知ハ万物ニ周クシテ、道ハ天下ヲ濟フ」とあって、濟は「すくう」である。（中略）また易経に「天地ノ大徳ヲ生ト曰フ」とあって、この生は生命と繁栄の意義、その繁栄を冀うと言う意（後略）」である。（濟生会編、恩賜財団濟生会七十年誌、東京：社会福祉法人恩賜財団濟生会；1982。p.5-6）濟世と濟生は同音であるが由来は異なる。唯、濟生会設立時に内務省は濟世病院の活動を調査し非常に

高く評価していた。（濟生会編、施療事業一斑・内務省衛生局調査、東京：濟生会；1911。p.7-12）

3) 中西直樹、仏教と医療・福祉の近代史、京都：法蔵館；2004。p.74

4) 真井覚深、濟世病院布教日誌、高野山大学図書館所蔵自筆本；1911-1929

5) 拙稿、濟世病院院長小林参三郎の精神的治療、密教文化（以下「密文」と略す）2019；242：148-161

6) 清瀧智龍、濟世病院。「六大」前掲（注1）誌：2-12

7) 筆者が参考にした小林に関する主な先行研究は以下である。室田保夫、宗教と医療—小林参三郎と濟世病院での実践—、「密文」1994；190：113-128、中西直樹、小林参三郎と濟世病院、仏教と医療・福祉の近代史、京都：法蔵館；2004。p.73-86、栗田英彦、宗教と医学を超えて—濟世病院院長小林参三郎の治療論—、東北宗教学2011；7：65-93

8) 京都医事衛生誌1927；395：49に「洛南東寺濟世病院は旧冬小林院長を失ふたが直に医学博士西谷宗雄氏を後任院長として迎へ（中略）今回更にその社会医学的方面に於ける活動の歩武を進め、産室及び乳児小児養護室の新設、結核及び性病の予防並に撲滅に対する新施設を企図し該事実の徹底のために特に「保健相談部」を設置することゝなった。（後略）」との記事があるが、西谷は1年後院長職を辞し顧問に就任したので計画は実現しなかったかもしれない。

9) 小野市史編纂専門委員会編、兵庫：小野市；小野市史・第3巻、2004。p.309-313

- 10) 小野市史編纂専門委員会編. 前掲(注9)書. p.311
- 11) 済世病院の仮開院. 「六大」1909; 303: 17
- 12) 主な参考史料は以下である. 日本杏林要覧(日本杏林社 明治42年), 日本医籍録(医事時論社 大正14年 昭和9, 17, 26年), 日本医籍年鑑・西日本版(医事新報社 平成4年), 京都府立医科大学一覽・卒業生名簿(昭和16年), 京都帝国大学医学部芝蘭会会報(芝蘭会 大正15年), 産科婦人科医学会会員名簿(昭和12年), 日本医学博士録(東西医学社 昭和19年), 帝国医師名簿(帝国医師名簿発行所 大正11年), 大日本医師名簿(金原出版 昭和6年), 日本医師名簿(日本医事新報社 昭和8年).
- 13) 日本杏林要覧. 東京: 日本杏林社; 1909, p. 193に稲垣は「京都府医籍登録(追録)41年8月」と記され, 小野市史. 前掲(注9)書や「六大」前掲(注11)誌には京都府立医大の助手と記されているが, 済世病院では医師として従事した可能性もある. 但し府立医大の卒業生名簿に名前はない. 本稿では小野市史や「六大」の記載に従い助手とした.
- 14) 東西医学社編著. 日本医学博士録. (以下「医博士録」と略す) 東京: 皇国図書株式会社; 1944, p. 542
- 15) 日本医籍録・昭和十七年版. (以下「医籍S17」と略す) 東京: 医事時論社; 1942, 三重県 p. 28
- 16) 「医博士録」前掲(注14)書. p. 81
- 17) 日本医籍録・昭和九年版. (以下「医籍S9」と略す) 東京: 医事時論社; 1934, 兵庫県 p. 39
- 18) 「医籍S9」前掲(注17)書. 京都 p. 31
- 19) 「医籍S17」前掲(注15)書. 京都 p. 15
- 20) 日本医籍録・昭和二十六年版. (以下「医籍S26」と略す) 東京: 医事時論社; 1951, 京都 p. 15
- 21) 「医籍S9」前掲(注17)書. 山口 p. 19
- 22) 「医籍S17」前掲(注15)書. 京都 p. 10
- 23) 「医博士録」前掲(注14)書. p. 484
- 24) 「医籍S26」前掲(注20)書. 山口県 p. 29
- 25) 京都帝国大学医学部芝蘭会会報. (以下「芝蘭会簿」と略す) 京都: 芝蘭会; 1926, p. 41
- 26) 帝国医師名簿. 東京: 帝国医師名簿発行所; 1922, p. 77
- 27) 「医籍S26」前掲(注20)書. 宮崎県 p. 3
- 28) 「医博士録」前掲(注14)書. p. 585
- 29) 「芝蘭会簿」前掲(注25)書. p. 81
- 30) 「医籍S26」前掲(注20)書. 京都 p. 23
- 31) 「医籍S9」前掲(注17)書. 京都 p. 2
- 32) 「医博士録」前掲(注14)書. p. 561
- 33) 「医籍S9」前掲(注17)書. 京都 p. 12
- 34) 「医博士録」前掲(注14)書. p. 396
- 35) 「医籍S9」前掲(注17)書. 京都 p. 29
- 36) 「医籍S17」前掲(注15)書. 京都 p. 6
- 37) 「医博士録」前掲(注14)書. p. 66
- 38) 「医籍S9」前掲(注17)書. 京都 p. 31
- 39) 「医籍S26」前掲(注20)書. 広島県 p. 40
- 40) 高安正夫. 循環器学の先駆者一真下俊一先生. 心電図 1984; 4(6): 711-714
- 41) 「医籍S26」前掲(注20)書. 香川県 p. 9
- 42) 「医博士録」前掲(注14)書. p. 537
- 43) 「医籍S9」前掲(注17)書. 京都 p. 30
- 44) 「医籍S26」前掲(注20)書. 福井県 p. 14
- 45) 日本学術振興会学術部第四十小委員会報告. 1942, p. 41-66
- 46) 「医籍S9」前掲(注17)書. 京都 p. 10
- 47) 産科婦人科医学会会員名簿. 京都: 産科婦人科医学会事務所; 1937, p. 45
- 48) 泉孝英. 日本近现代医学家人名事典 1868-2011. 東京: 医学書院; 2012. p. 638
- 49) 「医博士録」前掲(注14)書. p. 549
- 50) 診断と治療. 1928; 15(2): 221-226
- 51) 「医籍S26」前掲(注20)書. 兵庫県 p. 19
- 52) 「医籍S9」前掲(注17)書. 京都 p. 5
- 53) 「医籍S17」前掲(注15)書. 京都 p. 15
- 54) 「医籍S26」前掲(注20)書. 京都 p. 30
- 55) 「医籍S26」前掲(注20)書. 京都 p. 2
- 56) 「医博士録」前掲(注14)書. p. 159
- 57) 「医籍S26」前掲(注20)書. 埼玉 p. 33
- 58) 厚生時報. 1944; 9(1): 16-19
- 59) 「医籍S26」前掲(注20)書. 群馬 p. 3
- 60) 「医籍S26」前掲(注20)書. 山梨 p. 5
- 61) 国立国会図書館オンライン・データベース. (以下「国会図書館DB」と略す)
- 62) 「医籍S26」前掲(注20)書. 三重県 p. 9
- 63) 済生. 1966; 458: 20-22
- 64) 「医籍S26」前掲(注20)書. 鹿児島県 p. 37
- 65) 日本医籍年鑑・西日本版. (以下「医籍H4西」と略す) 大阪・東京: 医事新報社; 1992, 京都 p. 59
- 66) 「国会図書館DB」
- 67) 「医籍S26」前掲(注20)書. 京都 p. 24
- 68) 「医籍H4西」前掲(注65)書. 京都 p. 77
- 69) 岩田弘三. 大学助手職に関する歴史的研究. 日本教育社会学会編集委員会編. 教育社会学研究(第56集). 東洋館出版社; 1995, p. 101-103 官制上に明記された正規の職員として最初に助手が登場するのは明治26年8月11日改正の帝国大学官制からであるが, それ以前にも学内処置としての助手職が存在した. 帝大においては教育・研究補助, 帝大卒業生の卒業研修といった2つの系譜がある. 稲垣や多田の場合は医籍登録以前に大学や病院で研究や診療補助に従事したのではないだろうか.
- 70) 医員の交代. 「六大」1915; 619: 18
- 71) 木村毅. 小林参三郎氏小伝. 小林信子編. 柿の実・第二部. 京都: 静社社; 1926, p. 30-33. 「著述と晩年の日常」の項に大正末頃の小林と真宗僧侶との交流や穏やかな日常について記述されている. 病院では午前中に患者と共に30分間静坐し午後は入院患者

- を回診して3時半に帰宅する毎日だったようである。
- 72) 拙稿。前掲(注5)論文。149-161 小林の精神的治療は時代により変化した。「初期」は主に真言宗教義や哲学的内容を交えた毎日の診療前に行う信仰講話だった。小林は自らの心身の不調から「静坐法」に傾倒した。「中期」は病院で「静坐治療」を採用し静坐を「行」として患者と共に修した。「後期」は真言宗教義を離れ浄土門の「安心論」に重点が置かれ、自らの信仰の姿(「信」の静坐)を通して病氣治療における信仰の重要性を患者に伝えようとした。
- 73) 室田保夫。近代における真言宗の社会事業—明治後期から大正期にかけての覚え書—。高野山大学論叢 1995; 30: 72-75
- 74) 小林の外遊。「六大」1915; 594: 18
- 75) 小林院長の帰朝。「六大」1915; 632: 32
- 76) 医員の交代。「六大」前掲(注70)誌: 18
- 77) 室田前掲(注73)論文。75-77
- 78) 今井幹雄。明治の社会事業。同編。真言宗百年余話(明治・大正篇)。京都: 六大新報社; 1996. p. 330 「明治の社会事業」の中で今井は「明治の社会事業といえ、最も華々しく脚光を浴びたものは、何といっても日本最初の仏教慈善病院たる祖風宣揚会の濟世病院である。然しこの濟世病院は数々の栄光と功績を残して、太平洋戦争後、米軍の命令によって閉ざされた聞いている。」と述べている。また、昭和21年10月18日発行の「中外日報」に「市内八條東寺境内にあって相当古い歴史を持つ濟世病院は今回内部施設の不完全なためその筋から注意され、遂に閉鎖することとなり入院患者も各病院に移送しつつある。」との記事がある。
- 79) 大正6年までの年賀広告には病院名が「濟世病院」と記され、翌7年より「京都濟世病院」に変更された。本稿では真言宗との繋がりを示すため標題を「東寺濟世病院」とした。原則として常用漢字を用いたが一部固有名詞その他で旧字体も使用した。元旦日付や電話番号等の反復される語句や論文趣旨から不要と考える語句は削除した。また、年賀挨拶文の内容が前年と同義の場合一部もしくは全文を省いた。職種・職員が前年と同じ場合「職種(職員姓)」とまとめて記した。

## Changes of Doctors and Treatment Policy in The Saisei Hospital at Tōji Temple, According to New Year's Greetings in *Rokudai Shimpo*

Takahide YAGI, M. D., M.A. in Esoteric Buddhism

Laboratory of Buddhist Medicine, Shinonome Clinic

The Saisei Hospital was a charity hospital established in 1909 at Tōji temple by the Shingon-shū Sofū Sen'yōkai (真言宗祖風宣揚会). *Rokudai Shimpo* (六大新報) was the official publication of that Buddhist group. In the New Year's greetings in *Rokudai Shimpo* from 1910 to 1946, 47 doctor's names appeared. When the hospital was established, two other doctors practiced medicine. So, 49 or more doctors practiced medicine for the 38 years that the hospital existed. The treatment policy of the hospital fell into two periods, with an early emphasis on the director Kobayashi Sanzaburō's special treatment policy, and with later on the policy of the advisers from the University of Kyoto. During the early period, Kobayashi, with beginning-level doctors, treated patients by both Western medicine (physical treatment) and Buddhist faith (spiritual healing) according to the ideas of "non-duality of mind and body" (心身不二). Later, mid-level doctors who belonged to the University of Kyoto treated patients by general Western medicine. It seems that the later management of the hospital was stable, but the specificity of medical care was lost, compared to the early period.

**Key words:** Saisei Hospital, Kobayashi Sanzaburō, *Rokudai Shimpo*, University of Kyoto, Saiseikai